

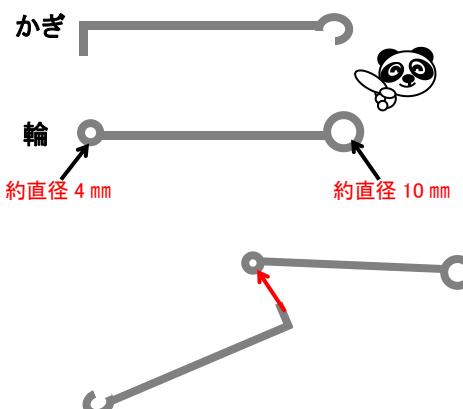
立体視の検査-輪とおし法:足立式



目的

・実用的両眼立体視の有無をみる定性検査
・両眼視の獲得・強化・術後の幅渉訓練

準備物 針金のかぎ・輪(色は特定なし)



山本裕子:斜視・弱視の診断検査法第2版
P107 図67

検者と被検者が相対して座位し、
それぞれ検者は小さい方の輪を
被検者はかぎを持つ

直径4mmが眼前30cm
で可能なら視差10'

検者は被検者の正面に輪の面を垂直
にして(立てて)差し出し、被検者に両
眼開放のままでかぎを輪の真横から中
に通すように指示する

眼前20~40cmの色々な
距離で5~6回行なう

横から覗き込まない
ように注意!

片眼でも同様に繰
り返す

例)
うまく通せない!

うまく出来ない時は
直径10mmを用いる。
(以前は10mmと20mm)

色々な距離で確実に通す
ことが出来た!

結果・記載例)

両眼(-)
片眼(-)

両眼(+)
片眼(+)

両眼(-)
片眼(+)

両眼(+)
片眼(-)

自分の結果を書いておこう!

手先の稚拙さもあるの
で、出来る、出来ないに
拘らず、明らかに両眼と
片眼で差があれば、パン
ダは、ほぼ立体視(+)と
考えて良いと思う。

判定不能

大まかな立体視(-)

大まかな立体視(+)

長所

- ・視力不良でも、大まかな実用的立体視が測定できる。
- ・手と眼の連合運動であり、2~3歳位から可能。(距離感は手と共に発達するので融像を引き起こしやすい)

直径10mmでも判定
は同じ。

短所

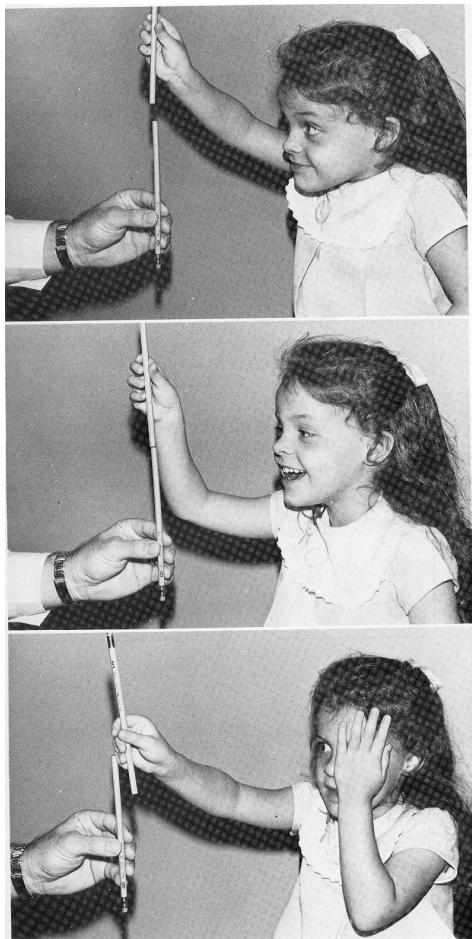
- ・両眼視がなくとも、片眼でも出来る場合がある。(片眼で距離感が出来ている場合)
- ・微小角斜視で(+)になる。(この程度の立体視は持っている)
- ・かなり大きな斜視角でも(+)ことがある。

立体視の検査(two-pencil法)



目的
日常の大よその立体視の有無をみる定性検査
アトラス斜視 (立体視 約 1,000~3,000")
眼科検査ガイド(立体視 約 3,000~5,000")

準備物 長さ 17cm位の鉛筆 2本



アトラス斜視 P69 図 46 より

検者と被検者は互いに1本ずつ鉛筆を持ち、両眼開放した被検者の眼前約33cmに、検者は鉛筆の先を被検者の眼の高さにて保持する

鉛筆を上方から、検者の鉛筆の上にのせるように被検者に指示する

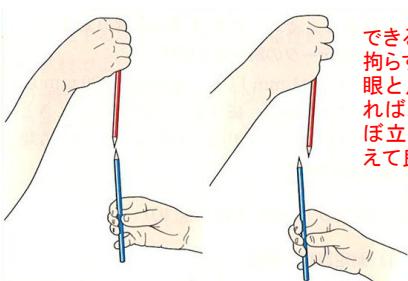
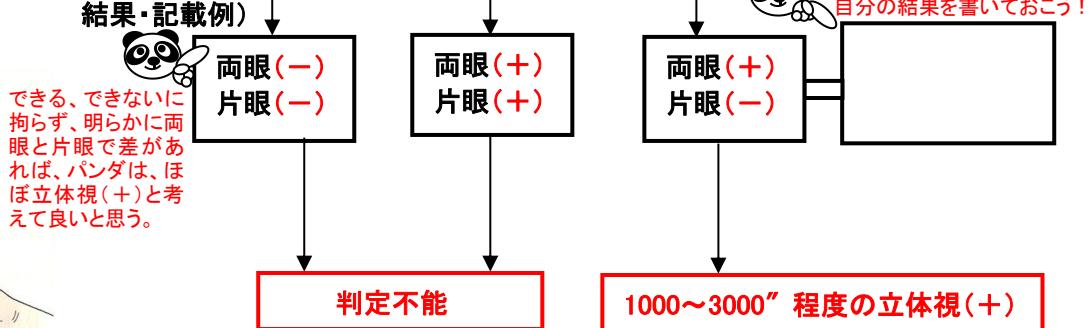
検者は鉛筆の位置を変えたりして、何回か繰り返す

片眼ずつ同様に繰り返す

例)

重ならない！

しっかり上から重ねることが出来た！



眼科検査ガイド P357
これは鉛筆の芯の方となっている



特別な装置なしで、大よその日常での立体視が判る。



大人の眼筋麻痺症例に対してさし検査(定位の誤認)としても使用できる。